
アマガミ とある男子高校生の物語

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミ とある男子高校生の物語

【Zコード】

Z0176Z

【作者名】

月下氷人

【あらすじ】

輝日東高校に入学した主人公『加藤 悠人』がおくる普通?の高校生活の物語です。

アマガミ2期放送するので、思わず書いてしまいましたー。物語は高校1年生から始まります。メインヒロインは未定ですが、七咲にしたいなあと私は思います。

設定（前書き）

本来のアマガミは90年代のお話ですが、この小説では2011年辺りの物語と設定します。なので、携帯電話、pc、psp、wiiなど余裕で出てきます。

設定

若干ネタバレがあります

本作の主人公

- ・名前 加藤 悠人 (ゆうと)
- ・クラス 1年A組 2年A組
- ・誕生日 10月10日
- ・身長 純一より少しだけ低い
- ・髪型 純一より長い髪
- ・顔 イケメン（女性顔に近いかも）
- ・性格 少しめんどくさがり屋 天然
- ・家族構成 父、母、妹
- ・学力 1位、2位を争うくらい頭がいい
- ・特技 ギター（アコギ、エレキ） ピアノ
- ・才能 料理
- ・好きなもの（こと） 楽器を弾く アニメ 漫画
- DVD 甘いもの、可愛いもの お宝本、

輝日東高校の生徒会長をしている。（訳あり）運動もほぼできる。

純一、美也、梨穂子とは幼馴染。梅原とは小学生から、薰は中学から悪友。

制服はかなりくずしている。（シャツ出しやネクタイを緩めているなど）

一人暮らしで一戸建てに住んでいる。

親と妹は転勤でアメリカに住んでいる。

水泳は母親に無理矢理やらされた。けど、ピアノ、ギターは自分も好きで、父親から習った。

顔は女性顔に近い。ギリ男性顔。女顔と言われるのが嫌い。ケンカがかなり強い。暴力事件も何度も起こしている。このことは、純一とその関係者しか知らない。

設定（後書き）

Angel beats! の2次創作と同時進行なので、更新が遅れる場合がありますので、その時はすみません。

第1話 入学と生徒会長就任（前書き）

どうも月下氷人です。アマガミの小説どうしても書きたくて書いてしまいました。どうぞよろしくお願いします。

第1話 入学と生徒会長就任

俺は今日から高校生になる。

やつたぜー。

俺は気分がいいので親友の橘純一を起こしに行きたいなと思います。
ちなみに純一の家は俺の家から徒歩五分くらいです。

ピンポン

「加藤でーす」

ガチャ

「おひ美也ちゃん」

「あつユウ君。おはよう」

「おはよう」

「何ジジロジロ見てるの?」

「あ、いやー、美也ちゃんが可愛くて」

彼女は橘美也。純一の妹である。
美也ちゃんは猫っぽくてかわいいなー。

「うふ……／＼／＼ 朝から何喋つてゐる／＼／＼

「いやー、われよつ純一起きてる?」

「ここにならまだ寝てるばど…」

「相変わらずだなー。今日から高校生なのに…」

「わっかー。ここにことコウ君はもう高校生かー」

「うふ。美也けやとは中3だつけ?」

「わっだよ。受験勉強めんどくせーことよ」

「まあ、わっだけどあつてこつて聞だよ」

「せうかなー」

「うふ。わうそり純一起いれなこと」

「わうだね。上がつてー」

「それじゃあ、お邪魔しまー」

俺は橋家へ上がらせてもらつた。
俺は純一の部屋に行つた。

「いない……つてことは押入れか……」

俺は押入れを開けた。

「起死回生」。

起きない……。そうだ！――

「俺のipodを音量MAXにして……」

俺は純一にイヤホンをさせ、音量MAXで音楽をかけた。

「ナニヤアーッ！」

「たかと起きた

「何すんだよー」

「からね」が起きる一純

「でかなんでもどうか」しているの?」

「おまえを起しに来た。今日から高校生だろ。ほら、早く制服に着替えろ」

「へいへい」

俺は下に戻り、美也ちゃんと適当にしゃべつた。
その後、純一がおりて来て、朝食を食べ、行く準備が整つた。ちなみに俺も朝食をいただいた。

「よし、じゃあ行くが

「わうだな

「ここにゴウ君こいつてらしだーーー

「美也ちゃんが学校は

「みやーは明日から

「わうか、じゃあ

俺は橘家をあとにした。

登校中

「今年は彼女つくれたいになー

「はーー

純一は大きく溜息をついた。

無理もないかー。あのクリスマスのことまだ引きました
いだし…。

「元気だせよ、純一。今年はできるよ」

「いいよなーユウは。イケメンだし、頭いいし…。おまえ絶対モテてるだろー?」

「んなことねーよ」

「絶対にモテてるねー!」

「どーした2人とも?」

突如不審者が現れた。

「「おまえだれ?」」

「2人とも会つていきなりそれかよー」

もちろん知っている。こいつは梅原正吉。悪友だ。

「まあこれを見てみ?」

「「おおーーーー!」」

「お宝本だぜ」

「いやー思い出した。君は小学生からの悪友の梅原正吉君ではないかー。なあ純一」

「いやー僕も今思い出したよー」

「 そ う か そ う か 。 い や 一 こ れ は 手 に 入 れ る の が 大 变 だ つ た ゼ 。 あ と で 見 し て や る よ 」

「「流石梅原——！！！」」

ちなみに俺はこういう本やDVDはけっこ好きである。見ちゃ悪いか!? 俺だって男だぜ!?

「さてそれは入学式が終わった後のお楽しみってことでー」

俺らは学校へ向かつた。

しばらく歩いていたら、俺の携帯が振動した。
メールだ。

「えーと、げつジジイからだ」

「ジジイって誰だ？」

「輝日東の校長だ」

「おまえ校長と知り合いなのか!?」

「 そ う な の ！ ？ 」

「まあ、一応。親戚でな。あのジジイが入れつて言つたから」

入った

「すげーな

「へえいだけだ。えつとメールの内容は……」

学校に着いたら、校長室へ来てくれ。

よろしく〜(^ - ^) -

「めんど〜…」

「校長顔文字使つてるな

「やうだね…」

少々頭がおかしい校長である。

そんなことしてゐうちに学校に着いた。
俺たちは今、クラス表を見ている。

「お、俺A組みだ

「僕もA」

「俺もだ」

「また一緒に

「ああ

「そうなんだね

ちなみに中学の時も同じクラスだった。

「んじゅ俺は校長のアホのところ行つてくるかひ

「ああ。んじゅまた後で

「じゅあなた

俺は校長室へ向かった。
本当何の用だよ?

「来たね」

校長室

「何のよひですかジジイ」

「ジジイと呼ぶなー」

「んでも何のよひ、ジジイ」

「せめて学校ドヘりこちやんと校長先生ひて呼んで」

「用件無いなら帰りますよ」

「わかつたわかつたからー。帰らないでー」

「んでも何の用ですか?」

「「ホン。実は昨年度で生徒会長が転校してしまって。それで、悠
人に生徒会長をしてもらいたいのだが…」

「お断りです。では失礼します」

「待つてー。もう少し考えてよ」

「面倒そうなんで」

「やう言わす」

「そもそもなんで俺なんですか? 今の三年生にでも頼んでくださいよ」

「何のために奨学金を出したと思つてゐ?」

「俺を生徒会長にするため？」

「ダッシュライト…」

「殺す！！！」

「JRみんなでこどもJRみんなでこども」

「いいのか？ 一年の俺にやめて？」

「問題はない！！すでに3月の修了式で言つてある。来年度の生徒会長は入学する1年生がやると」

「親戚の関係だから」

「それだけ？」

「それだけ」

「殺す！！！」

「待つた待つたーー！」 じゃあ交渉しよう

「その手には乗らん」

「もし生徒会長になつてくれたら、私の秘蔵のお宝本とローロセットをプレゼントをしよう」

「さよないとおもてなしてくれ

H口本とH口D▼Dで考え方を変えるとか俺、どんだけの人間だよ…

「じゃああと少し選学金くれたらやる」

「わかった」

「よし、交渉成立ー。生徒会長にならせてやるよ

「おおーありがと」

「いえいえ。お宝本とロ▼ロもよろしくお願ひしますよ」

「もういいよ」

こうじて俺は生徒会長になった。

H口本とH口D▼Dのために…

俺の席は窓際の1番後ろの横である。左隣は女子である。俺の斜めが純一で俺の右隣が梅原である。

「あんたも」のクラスなの？」

「お、薰かー。久しぶりー」

「久しぶりー」

「そういえば、純一たちは？」

「トイレにでも行つたんじやない？」

「わづかー」

「ジーー」

「なにジッと俺の顔を見るんだよ？」

「いやー前々から思つてたけど、けつこううつて女顔だなーって

女顔だと…。けつこううつ…。

「いやそんなに丑いないです。よく見たからか…」

「そうか…。よく見たからか…」

「私もちよつとトイレ行つてくれねー」

「ああ」

薫もトイレに行ってしまった。

こしてもけつこひむなー。

……暇だなー。お隣さんででも声をかけよつ。

「お隣さん。お前なんぞ言ひのへ..」

「え? 田中恵子ですか?..」

「田中かー。俺は加藤悠人。みんなにはコウとか呼ばれてるよ。ま
あ、好きなよつて呼んで。よつべーー」

「よ、よつじへお願こじまゆ...」

あら、ちよつとこせなりすぎたか?

「あ、わいーー。こきなつすぎたかー」

「そんなことない。嬉しいー。話しかけてくれて」

「そつか、それはよかつた。といひで俺の顔つて女顔?」

「え? 別にそこまで女顔じやなこと思ひ?..」

「少しあは女顔つぱつぱつへー」とへ..」

「う、うん」

「せうか…」

「でもその……かつ」この顔だと想こますよ

田中が頬を赤くしながら言った。
その照れた顔かわいいなー。

「そんなに見ないでください…」

「いや、かわいになーって思って…」

「え／＼／＼？ そんなことないですよ／＼／＼

「いやかわいいつて。それよりありがとな

「え？」

「俺の顔の」と

「いえ

「あと敬語使わないでよ

「えー…」

「俺らもう友達だろ

「あ、うん／＼／＼

「ついで田中と友達になった。

しばらくしたら、先生が来た。

「私がこのクラスの担当の高橋麻耶です。
よろしくね」

「なあユウ」

「どうしたマサ」

ちなみに俺は梅原正吾のことをマサと呼ぶ。

「あの先生けつこう美人じゃね？」

「確かに……」

純一にも確認してみよ。

「なあ純一……？」

「ダメだ。こいつかなり見惚れてる。
こいつ年上好きだからなー。」

「静かに…… 加藤君」

「すみません。ついよく俺の名前すぐ【】でましたね」

「まあ、あなたは有名だか？」

「有名？」

「おまえもう何かやらかしたのかー！？」

「やうなのー？」

「流石ユウね」

「マサ、純一、薫が言つてきた。
まあ、多分あれのことだろう。

「まあ、加藤君の【】とはあとでつてことで。【】これから入学式だから。
廊下に並んで体育館に行くわよ」

入学式かー。めんどい…。

俺たちは今体育館に向かってます。

はいかなりめんどいです。帰つてギターでも弾きたいです。

「なあユウ、一体何やらかしたんだ？」

「もしかしたら校長先生と関係あるの？」

「そりゃあ朝呼ばれてたなー」

「純一君、正解でーす」

「んで何があつたんだ？」

実はな

俺は純一とマサに生徒会長になれた話をした。

「ちが生徒会長たて！？」

「声が大きい」

ある物を手に入れるためには俺は生徒会長にならなければ

「ある物」

それにはたなびく

「ああ。」のあと取りに行へつもりだ。マサのと一緒にあとで鑑賞会だ

ג' ג' ג' ג' ג'

訳のわからないやりとりをしてるうちに体育館に着いた。

入学式開始5分後：

俺爆睡中。

「ええ、新入生の皆さん入学おめでとうござります。えー…」

⋮
z
z
z

一 麻耶ちゃんって何よ。それより寝るなーーー! 「

二二

— ケスツ —

前にいる田中に笑われた。

アホ3人（純一・マサ・薰）は腹を抱えながら必死で笑いを抑えていた。あとで覚えとろよーーー！！

「えっと実は今年度の生徒会長がこちらの都合上新入生の方が生徒会長になることになりました。それじゃあ、加藤君でてきてください

い
L

「はあー！？」

「　「　「あつははは」」

アホ3人が笑いだした。

「てめーら笑うな」

「まさかユウが生徒会長になるとは」

なぜか薰が知っていた。大方純一かマサにでも聞いたのだろう。

「早く教壇へ行つてください」

「へーい」

俺は教壇へあがつた。

「えーと、何か挨拶すればいいんですか？」

「はい」

まさかこんなことになるとは…

「えーと、急遽生徒会長になつた1-Aの加藤悠久です。まあ、なつた理由は、こここのアホの校長のせーです。別に俺がなりたいつていつてなつた訳でないんで。よろしくー」

適当に挨拶して俺は教壇を降りた。

そして入学式が終わり、教室へ戻った。
俺は薫と話をしていた。

「「ウ よく引き受けたわね。コウ頭はかなりいいけど、この二つの
は普通やらないでしょ？」

「まあね。ある物のために俺は生徒会長になつたんだ」

「ある物？」

「それは『想像にお任せします』

「ふーん。言えない物か」

「女子に言つたらひかれる」

「もうわかつたわ。よくそれだけで引き受けたわね」

「まあ、それだけじゃないんだよね。いろいろお世話をなつてある
…。その恩返しみたいなものもある」

「そう。そういえば私新しい友達ができたのよ

「友達？」

「私の友達恵子でーす」

「何だ田中か

「何だつて何よ?」

「もつすでに俺らはお友達です。なあ田中

「ひ、うん／＼／＼

「ちよつと恵子? 何で顔が赤いの? ュウ、何かしたでしょ。お尻触つたとか

「俺はただ普通におしゃべりしただけだ

「嘘おつしゅーい!—

「んだとーーーーーーーー

「はいはい、みんな席着いて

「麻耶ちゃんが来た。

「ほら、加藤君、棚町さん、早く座りなさい

「へーーー

「はーい

俺らは麻耶ちゃんが言つた通りに座つた。

「明日は係り決めと教科書配布があるから。あと加藤君はあとで職

職員室に来て

「えーーー..」

「来るのよ

「…<こ

「じやあ今日は終わり」

俺は職員室に行くことになつた。
このあと純一とマサとでお宝鑑賞会だとこいつのこ…。あとで校長室
に行かないといけないし…。

「なあ純一、マサ、ちょっと待つてくれない

「了解だよ

「了解。大将のお宝のためだ」

こつして職員室に俺は行つた。

「来たわね」

「何の用ですか？ 麻耶ちゃん

「私の麻耶ちゃんがさつてこのやめなせこ

「ここちゃん

「じゃあ何で麻耶ちゃんって呼ぶのよ

「それば可愛いかいっ..」

「私が?」

「ナリ

「……。お、お世辞でも嬉しきわーーー

「お世辞なんかじやあつませよ。それじやお俺なれで…

「待ちなさい。本題がまだ残つてこるわ

「う…

早く鑑賞会をした…

「まあべつ終わるかひ

「早くしてだなこ

麻耶ちゃんから生徒会のひとりにこう聞かれた。
めごとへなこなー。

「まあ生徒会長についてはこのくらいかな。

今日はもう帰つていいわよ。明日からビシバシ働いてもううつから

「へーい。そんじゃ、わーならー」

「七八五」

俺は校長室へ行き例の物を手に入れ、純一たちと合流した。

「なあビーチ鑑賞会ある?」

「うちには美也が多分いるから…」

「それじゃあ俺ん家でいいよ。俺現在一人暮らしだし」

それが二七の家族アメリカにいるんだ」

「イエス」

「それじゃあ決まり！！」

俺の家で鑑賞会をすることになった。

この後はいろいろと問題があるため、カット

純一、マサ帰宅後

いやー、鑑賞会楽しかったなー。
ジジイもいいの持ってるなー。

そんな人が高校の校長やつていいのか？

……風呂入つて寝よ。

俺は風呂に入つてすぐに寝た。

なんかいろいろと疲れたぜ。

第1話 入学と生徒会長就任（後書き）

なんか無理矢理感あつてすみません。
キャラの口調とか間違つてたらすみません。

あと主人公は梅原のことを「マサ」と呼んでいますが、小野大輔さんC.V（ドラマCD）の原作の主人公の悪友「マサ」とは違いますので。ややこしくてすみません。悪友「マサ」は登場しませんので。

第2話 男子高校生の一日（前編）

会話文ばっかですみません。

第2話 男子高校生の一日

俺今一人で学校がん。

今日は純一を起しに寄らなかつた。

毎回毎回めんといじめん

お あそこを歩いているのは
秀和一 じゅわ

「おはより梨穂子」

「あ、おはよう悠久」

「あ、君つてあの昨日の生徒会長？」
「桜井と知り合いだつたんだー」

「うん、幼馴染なんだー」

「アリス……アリス、おめでた。」

「あ、ごめん。私は伊藤香苗っていうんです。よろしくね」

伊藤香苗かー。笑顔が可愛いなー。

「俺は加藤悠久。えーと……伊藤の笑顔って可愛いなー！」

「嘘だつたら言わないよ」

顔が真っ赤な伊藤も可愛いなー。

「悠人天然だからねー」

「梨穂子には言われたくないよ」

「むうー」

「梨穂子の怒つた顔も可愛いな」

「そ、そつ／＼／＼ ありがとう／＼／＼」

照れた梨穂子もこれまた可愛い。

「……／＼／＼」

「おーい伊藤？ 大丈夫か？」

「…はつ。だ、だ、大丈夫な訳ないでしょ／＼／＼ いきなりあんな
こと言つて／＼／＼」

「言つちゃダメだったか？」

「そんな訳ないけど、でも／＼／＼」

「いいじゃねえか」

「う、うん。私のこと香苗つて呼んでいいから」

「わかつた。香苗」

「悠人すごいなー。会つてすぐに仲良くなるとは」

「そ、うか？」

「桜井に悠人君、早く行こう」

一〇九

一
う
ん

こうして俺、梨穂子、香苗で登校した。

1 - A 教室

「田母、いのち」

「おはよう加藤君」

「あ、俺のこと下の名前で呼んでくれない？」 加藤だと少し反応が

「開しから」

「え!? う、うんわかった。わ、私のこともトの名前で呼んで/

11

たな……恵子が照れながら言つた。

下の畠前で呼び合ひくらいで照れるかな?

「わかつた、恵子」

「おひすくひ」

「薰か。おひすー」

「つて何で恵子また顔が赤いのー? ちよつとコウまたなんかやつたでしょ! ? 今度はスカートめくつたとか

「んなことしてねーよ? ただ下の畠前で呼び合ひおひすくひつただけだ」

「…あんた凄いわね

「何が?」

「……ダメだ」

もうつ向つてゐるのかわからぬ……。

「おひすくひ」

「おひすくひ」

「わつこえばお前けつひつになつてゐるー

「ああー。生徒会長のことか」

「わうわう。なんかもう一年生だけじゃなくて2、3年生でも噂になつてゐるらしいぜ」

「へえー。でも私は中学の時からの付き合いだけさー、あんたつて頭はいいけどこうつ面倒なことはやらないやつじゃん」

「だから、ただの。お世のためだと」

「薰。お世つて何？」

「ああー、あれよ。俗に言つてHACHICHな本とかロバロよ」

「え…あ…／＼／＼ 悠人君つてえ、えつちな本とか読むの？」

「あ、いや違うんだ…！… 違くないけど…」

「案外」こつはあーゆつ本を読むやつだから

「へ、わゆつて…」

「はー、席について」

麻耶ちゃんが来た。

あれ…。わゆいえば純一まだ来てないな。

「遅れてすみません…！」

「橋君。入学式の次の日に遅刻なんだから、いつなのー。」

「本当にすみません」

「…早く席に着きなやー」

「…はー」

…純一には呆れるぜ。

「それじゃあ今日は最初に係り決めをやつや いたいと思つます。
じゃあ加藤君がとりあえずしきつて」

「えーーー? 僕ーーー?」

「生徒会長でしょ。そあ、早く」

「…」解です

めんどくせーなー。まあ、ちやちやと終わらせますか。
俺は教卓のところに立つた。

「じゃあどうあえずクラス委員を決めたこと思つます。じゃあ誰か
いないか」

シーン

「じゃあ橘君がいい」と

「僕別に握手してないだろ……」

「こやー、やったそりゃ顔してたから

「どんな顔だよそれ……」

「じゃあマサ

「なんですか

「はー、シソ! あつがとなー。じゃあ真面目、誰かいないかー

「じゃあ誰もいないなら、私がやります

「お、えーと前ま…絢辻さんだつナ?」

「はー

「じゃあ絢辻さん決定つて」と。じゃあ後は絢辻さん任せま

す

「わかったわ

俺は絢辻に仕事を押し付け、席へ戻った。

いやー、ありがとつ。

「じゃあ次は…」

他の人もどんどん係りが決まつてつた。
ちなみに俺は生徒会長だから何も係りをやらなくてよかつた。
にしても絢掛けつこう綺麗な人だよなー。

休み時間

「なあユウ、純一。今日も午前中で学校終わるからゲーセンでも行
かない?」

「俺はオーケー」

「僕もいいよ

「棚町も行かないか?」

「私も行くー」

「薰が行くなら恵子も誘おうかなー。

「ねえ、恵子も行く?」

「うん。行こうかな」

「ユウが女の子を普通に誘うとは…。流石ユウだぜ。橘も見習えよ

「梅原に『言われたくないよ』

「ひして話してこらひて、休み時間が終わった。

この後は、教科書の配布だけで終わった。

「明日から始まるから。まあ午後は部活紹介のオリエンテーションだから授業は午前中だけよ。じゃあ今日は終わる

午前中で終わる学校は楽でいいなー。

「あ、加藤君と…絢子さん。ちょっと手伝って欲しいことがあるからあとで職員室に来てね」

「わかりました」

「えーーー

「来るよう」

「…」解です

「これからゲーセン行く予定があったのに…

「悪いみんな。わざと終わらせてすぐ行くからこいつのゲーセンで待つてて」

「わかったよ

「了解！！」

「オーケー」

「うん」

みんなに謝り、職員室へ行くことにした。絢辻と一緒に行くか。

「絢辻ー。ひとつ仕事終わらせて」

「うん」

絢辻を誘い、職員室へ向かった。

「加藤君って何で生徒会長になつたの？」

「できれば下の名前で呼んでくれない？ 俺苗字で呼ばれると、どうも反応が悪いから」

「わかったわ。確かに下の名前は……」

「悠人だよ」

「悠人君ね」

「うーん」

会話してゐつちに、職員室へ着いた。
荷物運びをされた。めんどかつたぜ。

「荷物運びを頼むとは…」

「まあ、あの量を先生一人は大変よ

「やうか？ けどこちの身にもなつて欲しいよ

「ふふつ。やうね」

お、絢辻の笑顔かわいいなー。

「どうしたの？ そんな私のこと見て」

「いやー、絢辻の笑顔がかわいいなーと思つて

「あ、ありがとうーーー

お、今度は照れた。

「んじゃ俺もう行くね。また明日ね」

「うん。また明日」

俺は絢辻と別れ、純一のいるゲーセンへ向かった。

ゲーセン到着一。

さてどこにいるかな?

俺はとりあえず格ゲー「コーナー」に行つてみた。

「ビンゴ」

みんなを発見した。

「みんな、遅くなつてごめん」

「遅いぞ、大将」

どうやら純一とマサはが格ゲーをやつておつ、薰と恵子がそれを見ていた。

「じゃあ俺音ゲーやつてくれるから

「じゃあ私も行くー」

「じゃあ私も

俺、薰、恵子は音ゲーラーナーに行つた。

ちなみにせる音ゲーは *sube a t* (ベート) である。あれ超面白いよ。

「お、全部の畠空じてゐるじゃん。じゃあ対戦しちゃ

「いいわね」

「うん」

俺は100円入れた。

おんなじ曲なら「えへへ」は各個人で決められる。

「じゅあい」の曲で

「オーケー」

「うん」

俺は「えへへ」でスタートーーー！

「まだ始めて2ヶ月すこやい」

「呑み込み速いわね……」

「薰だつてけつてできるじやん」

「私も少しやつてたりしてーーー」

「おつ、薰の笑顔意外とかわいい。

「お前の笑顔つて意外とかわいいんだな」

「な、何よいきなりーーー 照れるじゃないーーー」

「ははは

「……

恵子がなんか睨んでくる。

「……そう睨まないでくれ。ほれ、なでなで

俺は恵子の頭を撫でた。

「／／／／

あ、照れた。かわいい。

「ちょっと便所に行つてくるね

「わかつたわ

「う、うん

俺は便所へ向かった。

「あいつってば…。平氣であんな」と言つてくるなんて…。天然だ

わ

「うん。私も天然だと思つ

「ちょっとそこ」の女の子たち

俺は便所を済まし、薰たちのところへ向かった。
ん？ 男2人が薰たちのことナンパしてる？

「だから俺たちとこれから遊ばない？」

「遊ばないわよ

「いいじゃんよー」

完全ナンパだな。恵子なんてもうかなり怯えてるじゃん。早く助け
ないと。

「その辺にしてもらいますか？」

「なんだてめえ？」

「ゴウ」

「悠人君……」

「彼らの友達です」

「邪魔すんじゃねーぞ」

「そうだぞ」

男のうち1人が殴りかかってきた。ここで俺が殴つたら、警察に確実に連行させられるな…。俺は男のパンチを片手で受け止めた。

「何！？」

「あのー。痛い目に会いたくなかったら俺の視界から消えてもらえますかね」

俺は男2人を睨みつけた。

「ひつ…。おい逃げるぞ」

男2人は逃げていった。よかつたー、暴力ほぼなしで解決できて。警察沙汰はもうごめんだからなー。

「ありがとう、ユウ」

「おう。つて恵子大丈夫？」

恵子が泣いていた。怖かつたんだな。

「もう大丈夫だ。ごめんな。俺が誘つたばかり…」

俺は恵子の頭を撫でながら言った。

「ううん。悠人君のせいじゃないよ」

「おいーす。… て何田中さんを泣かせてんだよ?」

「どうかしたの?」

純一とマサが来た。来のおせーよ…。
俺はさつき起きたことを話した。

「そりゃあ大変だつたな」

「ユウ!! 暴力とかしなかつたか!? 怪我とかない!?」

「大丈夫だ。睨みつけたら逃げて行つた。怪我もない。ありがとな」

「よかつたよ」

俺の事を純一はよく知つてゐる。同時に純一の事を俺はよく知つて
いる。

その後、みんなでレースゲームしたりした。

「今のは… 1時か。みんな昼飯とかどうする? みんなで食べ
に行く?」

「悪い、大将。これから俺店の手伝いがあるから」

「うめーん。これから私もバイトがあるから」

「うめーん。これから私もバイトがあるから」

「私も用事が…」

「僕は別にいいよ」

純一だけか？

「じゃあ2人でどうか食べに行くか」

「そうだね」

じゃあそれで解散だね。 恵子に薫... 今庄本三に「みんな」

いふにあんがた悪い語りなしに樂がたれど

・ 二 人 懲 人 罪 が 悪 い わ け じ ゃ な い か で し ょ

「おじかと」

マサ、薰、恵子と別れ、純一と一緒に飯食いに行つた。

どこに行くか迷った結果、無難にファミレスにした。
俺たちはファミレスに入つた。

「いらっしゃいませー。只今店内は大変混み合つてますので、少々待つていただく事になりますが…」

「そりなのかな…。お、あそこには梨穂子と香苗じゃん！」

「向こうに知り合いがたまたまいたので…」

「はい、わかりました」

「え、知り合い？」

「ほらあそこ」

「あ、梨穂子じゃん。ともう1人は知らない子だよ。いいの？」

「問題ない。俺は知ってる。女の子と仲良くなれ」

「えー」

「ほりほり

俺は無理矢理純一を連れて行つた。

「相席いいですか」

「えー？ つて悠人君かー」

「あ、悠人に…純一！？」

「やつほー

「ども…」

梨穂子の反応…。もしかしたら…純一のことが好きなのか…？

…

あとで聞いてみよう。

俺と純一は席に座った。

ちなみに座り方は

香

俺

——
梨 純

である。わかりずらいなー。

「橘君も悠久君と桜井の幼馴染なんだ」

「ええ、まあ」

「2人はもう頼んだの?」

「ううん。まだ来たばっかなの私たち」

ジャストタイミングで来たな俺たち…。

「じゃあ僕はマートスペゲティにしよう」

「私はカレーライスにしよう」と

「私はオムライスと…」

「梨穂子…。純一のこじわる…」

「ハハ…。純一のこじわる…」

「体重感にしつらんだら」

「ハ、うそ。じゃあオムライスだけでこいや

」

「じゃあ押すぞ」

俺は店員メールボタンを押した。

「1」注文の方はお決まりじょつか? つてコウに純一…?」

「よハ、薰」

「お前これ狙つて来た?」

「やあ」

ウエイトレス姿で薰が接客しに来た。

「ハニカミは棚町だよ」

「ハーイ、桜井さん…と…」

「伊藤香苗だよ。よひこへな」

「棚町薰よ。よひこへー」

女子3人が会話してる中、俺と純一は薫の太ももを揉んでいた。二
「ソックスいいねー。余計太ももがよく感じる。

「ちょっと2人ともどこ見てるのよ／＼／＼

「いやー、その

「薫の太もも」

「ユウ、そんなあつさりに」

「…本店はゲス野郎の御入店はお断りですので、ひとつと出て行ってもらえます?」

「ちょっと…怖いよ薫…

「「「めんなさい」」

「悠人君と橘君って意外と変態さん?」

「「いや、その、これは男して…それより注文」」

「私オムライス」

「カレー ライスで」

「僕はミートスパゲティで」

「俺は…チヨコレートパフュード」

「昼食にパフューカよ」

「今日はそういう気分だから」

「はいはい。わかりました。少々お待ちを…」

薰がまた仕事に戻った。

「悠人君って甘いもの好きなの?..」

「まあ、好きだよ」

「へえー（覚えと）」

その後、注文したものきて、適当にしゃべりながら昼食を食べた。

「じゃあそろそろ行くか。純一、ゴチになりまーすーーー」

俺は某番組のアレを言つてみた。

「「「ゴチになりまーす」」

「なんでだよ……。」

「お前ビリだな。あとおみや代も……」

「何の話だよ……。」

「まあまあ、早く行きませう」

俺たちは会計を済まし、店を出た。
あ、もちろん別々で払ったからね。

「じゃあ帰りますか

「やつだね」

梨穂子と香苗と別れ、純一と一緒に帰った。

「じゃあねー、純一」

「うそ」

純一の方が家が学校に若干近い。

俺は帰もした。

今日は不良?に絡まれ、大変だったな。

第2話 男子高校生の一日（後書き）

誤字脱字があつたら、言つてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0176z/>

アマガミ とある男子高校生の物語

2011年12月1日17時00分発行